本美濃紙 / 本美濃紙についての概要

和紙は、8 世紀以前から美濃市で作られており、その最上級が本美濃紙と呼ばれています。本美濃紙は軽量かつ半透明で若干の艶があり、古くなっても劣化したり黄ばむことがなく、何世代も残る丈夫さを持ち合わせています。

写経から障子まで

美濃の和紙は本来お寺の写経に使われていましたが、その後、高級な障子や提灯の素材として標準的に使用されるようになりました。21 世紀に入ってからも、本美濃紙はその優れた手ざわりと丈夫さが評価され、世界各地の美術館で美術品の保存に使われています。本美濃紙の作り方や材料は何世紀もの間ほとんど変わっておらず、2014 年にはユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されています。

見かけによらずシンプルなアート

基本的に、本美濃紙の作り方はシンプルです。まず、パルプ状になったカジノキの靭皮繊維と水を混ぜ合わせます。それから、粘性分散剤を加えて繊維の固まりを防ぎ、水中での繊維が均一に広がるようにします。パルプ状のどろりとした液体を丁寧にすくい、目の細かい竹簀で濾すと、繊維が織りなす膜を捉えることができます。その後、圧搾して余分な液体を取り除き、天日で乾燥させます。 原料を

準備し、薄くて均一な紙パルプの層を形成するのに最適な混合を行うまでの工程が習得できるまでには、数年を要することもあります。

必要な材料と道具

和紙の制作には、楮（こうぞ）の樹皮、ミツマタ、雁皮（アオガンピ属の低木）などさまざまな材料が用いられます。本美濃紙は、楮（こうぞ）低木の内皮から採れる白皮繊維でできています。本美濃紙用の楮（こうぞ）の内皮は茨城県大子（だいご）から調達されますが、そこでは楮の成長が速いため、幹が真っ直ぐで細く、丈夫で柔らかな繊維が得られるのが特徴です。

ねべしという（多くの地域ではネリとも呼ばれる）粘度の高い物質を、水と楮（こうぞ）のパルプを入れた大きな桶に加えると、細かい植物繊維が水中で均一に広がり、塊が形成されなくなります。竹簀を通るパルプ状の液体の水はけも遅くなるため、その間、職人が紙の厚さを調整しやすくなります。ねべしは、とろろあおいの根を砕いて水に浸け、透明な粘液を抽出することで作られます。

本美濃紙の制作に使われる道具はすべて手作りです。楮（こうぞ）繊維を手打ちで砕く菊の花模様の木製丸槌など、一部の道具は美濃地方独自のものです。道具の一つ一つをそれぞれ専門の職人が作っていますが、道具の作り手の数も減少しています。竹簀（たけす）と呼ばれる、紙を漉く際に用いられる目の細かい網を作ることのできる職人は、たったの 1 人しかいません。各竹簀は、竹を

割り削って加工したものを 3,000 本組み合わせて、絹糸で縛ったものです。1 つの竹簀を作るのに、通常、1 週間を要します。

伝統を存続させる

第二次大戦後、障子など、昔ながらの紙の需要は減少しました。同時に、機械化の急速な改善により、高品質の紙が低価格で生産されるようになりました。20 世紀初め頃、美濃市には 3,700 箇所の和紙工房がありました。現在ではそれも 20 か所以下に減少し、そのうち本美濃紙を作っているのは 6 か所だけです。

本美濃紙を保全・宣伝するため、本美濃紙保存会が結成されました。職人の技術は、通常、家系で継承されます。しかし、美濃の和紙職人は、美濃紙の伝統を保全するため、現在、見習いを受け入れています。現在、本美濃紙は、本や芸術作品、近代的な提灯の制作に用いられています。例えば、本美濃紙は、京都迎賓館の障子や照明器具に採用されています。